

月報

<434号>

ケルンボン日本語
キリスト教会
二〇一七年一月二六日発行

『向こう岸へ』

マル「による福音書 四章三五〜四一節

佐々木 良子

小鳥の美しいさえずりを耳にするようになってから、真冬の肌に突き刺さるような空気が少しずつ優しくなり始めました。春の訪れを感じるこの頃ですが、今年初めての月報となります。今年度もこの誌面を通して、私たちの教会の様子を知って頂けたら幸いです。

先日は定期総会を終え、昨年主が私たちの教会に与えてくださった恵みの一つ一つに感謝しながら、イエスさまを船頭として、今年度、私たち教会が、そして私たち自身が目指すべき向こう岸へと、新たな船出をしました。

しかし、その航海は決して順風満帆なものではないことを、聖書のような場面から教えられます。主イエスと共に舟に乗っていた弟子たちは、荒れた湖の中で狼狽している時の様子が記されています。『……イエスは「向こう岸へ渡ろう」と弟子たちに言われた。……イエスを舟にのせたまま漕ぎ出した。……激しい突風が起り、舟は波をかぶって、水浸しになるほどだった。しかし、イエスは艫の方で枕して眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、私たちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。』(三五〜三八節)

主イエスが向こう岸へ渡ろうと仰せになったにも拘わらず嵐に見舞われ、恐怖の中にいる弟子たちです。一方、対称的に主イエスは平然と休んでおられるので「私たちを見捨てるのか……!」とでも言うような訴えをしています。これまで寝食を共にし、全面的に信頼を寄せていた弟子たちでしたが、今まで培ってきた

信仰は、どこに行ってしまったのでしょうか。弟子たちの信仰が足りなかったのでしょうか。

私たちが、いつも主イエスが共におられると信じていながらも、事あることに動揺し、「何と不信仰な者だろう……」といった私の信仰は「どこにあるのだろうか。」と幾度となく、同じ轍を踏み自己嫌悪に陥ります。しかし、主イエスは信仰の弱い私たちが、取り乱して叫びを上げる度に、見捨てることなく応えてくださるお方ですから、私たちのような不信仰なものでも、憐みによって何とか信仰が守られているのです。

さて、嵐だった湖はすっかり静まった、とあります(三九節)。主イエスは不信仰な私たちを重々ご存知の上で、いざという時に、悲痛な叫びに応えてくださるお方です。人間側の叫びは、御業を行ってくださる始まりでもあります。

その後、主イエスは「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」(四〇節)と、強い口調で仰っています。「恐れるな」という言葉は、聖書の至る所に記されています。先日礼拝後のお茶会の時にk宣教師より、三六五回記されていると教えて頂きました。単純に計算するならば毎日「恐れるな」と、語ってくださっていることとなります。

それは単なる気休めではなく、確固たる神の愛の裏付けがあります。神は独り子であるイエス・キリストでさえ、惜しまず十字架につけるまで、私たちを愛し抜き、命を与えてくださいました。見捨てられたと思うのは私たちの独りよがり、決して見捨てられる筈がないのです。

そのように神の愛を理解していても、私たちは忘れ、何度も失敗し、何度も叫び続ける情けない信仰者です。しかしその都度「恐れるな」と、励ましてくださいます。私たちが必死に信仰を保とうとして踏ん張っているなら、舟は沈んでしまいません。恐れの中で、叫び、主の御声をお聞きしながら、神が生きて働いておられることを何回も体験させて頂きつつ、かろうじてすがりついている状態です。

そうして「……いったいこの方はどなたのだろう……」

「(四〇節)と、主の御業に驚きながら、見えざる神との絶えざる応答の中で、信仰が生きたものとなっていきます。そうして私たちの信仰が、育まれていくのです。

弟子たち同様に、私たちの信仰生活の現実も自慢できるような立派なものではありません。「悲痛な叫び・驚き・感謝」のこの三拍子の連続といってもよいと思います。その出発点はいつも「不信仰の叫び」からです。しかし、出発点がなければ、常にそこに留まり続けるだけです。出発点があることは幸いなことです。

そうしてこの出発点に先立つてくださる主イエスは荒波の「向こう」の命へと一緒に歩んでくださいます。私たちのこの世の旅路は、何度となく荒れ狂う嵐の海を渡るようなものです。ですので、苦闘の場におられる主イエスが、私たちの叫びに呼んでくださりながら、向こう岸へといずれかは辿りつく船旅でもあります。危機の中で主イエスに叫べるかどうか……そこに私たちの命がかかっている、といってもよいと思います。

宗教改革者ルターは「信仰は色々の知識を頭につめこむのではない。ただひたすら神の約束を信じて進んでいくこと」と、語っています。信仰は、私たちが忍耐しひたすら努力し、又、必死に頑張っ保つていくことはできません。唯々、神の約束を信じ切っ歩み続けるだけです。イエス・キリストの約束の中に、私たちの信仰の全てがあることを信じてお任せするのです。

教会は、私たちの力で何かできる訳でもなく、私たちの立派さを示す所でもありません。唯、情けない弱い私たちに、主が憐みをもって御業を行ってくださることを指し示すだけです。今年、私たちの教会はどれ程の嵐が押し寄せてくるでしょうか。恐らくその都度動揺し、何度も不信仰な者になるでしょう。しかし、神の眞実を決して絶えることがありませんから又、憐みを頂きつつ新たな出発点として、仕切り直して歩めたら幸いです。

「ヨーロッパの日本人教会を訪れて」

川合 望

一. はじめに

ケルンボン日本語キリスト教会のみなさま、いかがお過ごしでしょうか。去る一月のヨーロッパ研修旅行の際には、たいへんお世話になりました。みなさまと出会い、教会の交わりに加えていただけて、いくつもの大切な思い出を作ることができました。今回の旅で、私は、生まれて初めてドイツを訪れたのですが、みなさまのおかげで、ドイツが、そしてケルンの街が大好きになりました。改めて、感謝申し上げます。

まず、簡単に、このたびのヨーロッパ研修の旅へと至った経緯を説明させていただきます。私は、日本基督教団の派遣宣教師として、アメリカ・サンフランシスコにある「パイン合同メソジスト教会」へと、二〇一六年中に派遣される予定でした。しかし、アメリカの新大統領の影響でしようか、なかなかビザが発給されずに、二〇一七年となった今でも日本に留まっています。そこで、この時間を利用して、海外にある日本人教会を訪問し、その現状を学ぶために、ヨーロッパ研修の旅に出かけることとなりました。

このヨーロッパ研修の旅で、私は三つの教会を訪れました。ドイツ・ケルンのケルンボン日本語キリスト教会、チェコ・プラハのコピリシ教会、ベルギー・ブリュッセルのブリュッセル日本語プロテスタント教会です。それぞれの教会で、とても貴重な経験をさせていただきました。お伝えしたいことはたくさんあるのですが、ここでは、各教会で体験した最も印象深い事柄にしぼって書いていきます。

二. ケルンボン日本語キリスト教会(佐々木良子牧師)

私は、渡米を待ち望みながらも、しかし同時に、ひとつの大きな不安を抱えています。それは、「英語の不得意な私が、果たして、アメリカに行く必要があるのか」という不安です。パイン合同メソジスト教会にどう人々のほとんどは、すでにアメリカでの生活

が長く、英語でのコミュニケーションに特に大きな問題はありません。アメリカ人の牧師の説教でも、充分に内容を理解できます。ならば、「なぜ、私がアメリカに行く必要があるのか」という不安を、私は、ずっと抱えていました。しかし、このような不安は、ケルンボン教会のみなさまと出会えたおかげで、私の心から完全に払拭されました。なぜなら、日本語での交流を求める切実な思いを、みなさまから感じ取ることができたからです。日本語での牧会、礼拝説教、そして交わりを望むみなさまの願いを、身をもって知ることができたからです。それが、やはり「母語」の重さなのだと思えられました。

もうドイツで五〇年近く暮らしている教会員のF氏が、私にこう告げてくれました。「ドイツ語を話すのには、かなりの気力と体力が必要です。日本語での会話は、とても楽です」。この言葉が、アメリカに向かう私にとって、大きな励みとなりました。

三. コピリシ教会(孫信一牧師)

チェコは、マルティン・ルターの先駆けとなった宗教改革者フスを生み出した国であり、歴史的・文化的に重要な教会もたくさん残っています。しかし、かつて社会主義国であったためか、チェコのクリスチャン人口は決して多くありません。二〇一一年に実施された調査によれば、カトリック信徒が人口の約一〇パーセント、プロテスタント信徒に至っては、わずか〇・八パーセントに過ぎません。

このような宗教的状况のため、コピリシ教会に集まる人数も、きわめて限られています。孫先生によれば、最近では、日本人・韓国人がそれぞれ五〜六名ほど、あとはコーラス・グループに所属する一〇名ほどの日本人が、教会にいられているそうです。

コピリシ教会を訪れて、私は、チェコに暮らすアジア系のクリスチャンはもちろん、教会に仕える孫先生も、深い孤独を感じながら、しかし、互いに助け合っ

て必死に生きているんだと知りました。私は、チェコ滞在二日目に、ドイツとの国境近くの雪深い村に暮らす、コピリシ教会員のご夫妻を訪問さ

せていただきました。孫先生の運転する車で、片道三時間かかりました。午前十一時に出かけて、途中、休憩をはさみながら、家に帰ってきたのは夜八時でした。日本であれば、近隣に仲間がいて、気軽に相談したり、助け合ったりできます。しかし、海外であれば、特にチェコのような特殊な宗教的事情を持つ国では、教会員や友人に会いに行くだけでも数時間かかってしまいます。しかし、おそらく、このような状況は、チェコに限られたものではなく、程度の差こそあれ、ドイツでもアメリカでも、ありえることなのでしょう。そうして、とりわけ海外に派遣された宣教師は、牧会上の苦悩を、誰にも打ち明けることができず、ずっと胸の内に秘めるしかありません。それは、かなりのストレスとなります。もし可能であれば、日本基督教団が定期的な人を派遣して、海外の宣教師や教会員への牧会的ケアがなされるように祈りながら、私はチェコを去っていきます。

四. ブリュッセル日本語プロテスタント教会(川上寧牧師・真咲牧師)

ブリュッセルで、私は、生まれて初めて、「難民」と呼ばれている人たちに会いました。帰国して一ヶ月近くが経ちますが、いまだに私は、彼らの眼が忘れられません。大人も子どもも、「難民」と呼ばれる人たちは、常に、悲しい色を漂わせて、何かにおびえた、不安な眼差しをしていました。たとえば、私たちも、見知らぬ街で迷子になったら、おびえた不安な眼をしますが、そんなレベルではありません。まさに、「難民」の人たちは、「この世界で迷子になっている」、「世界のどこにも居場所がない」という悲しい眼をしていました。

世界では、今、「難民排除」の声が大きくなりつつあります。それでも、今回、訪れたドイツやベルギーという国は、「難民」に対して、寛容な政策を取っています。「難民を受け入れようとする人々がいる」という現実には、私は、この深く傷ついた世界においても、なんとかして、明日への希望を見出したいと思つて

ブリュッセル日本語プロテスタント教会の礼拝で、私は、聖餐式の司式を務めました。ビザの発給が遅れているため、この教会にもまだ日本から宣教師が来ておらず、教会員の方々にとって、そして、私自身にとっても、久しぶりの聖餐式でした。

聖餐式で、私は、「これは、キリストの体です。これは、キリストの血潮です」と語りながら、一人一人に直接、パンと杯を手渡しました。教会員の方々は、本当に喜びと感動をもって、そのパンと杯を受け取られました。聖餐の恵みを求めている気持ち、ひしひしと伝わってきました。その瞬間、私は、牧師として最高の高揚感に満たされました。やはり、この仕事が好きなんだと、自分自身で再認識できました。

五. 異国の地での二度の礼拝を通して

このヨーロッパ研修の旅において、私は、ケルンボン教会とブリュッセル教会で、主日礼拝の説教を奉仕させていただきました。礼拝の中で、祈りながら、また説教を語りながら、私は、「今、ここにいる、すべての人たちがつながっている」という不思議な感覚に包まれました。遠く離れた地の、初めて出会った人たちと「あ、今、心が通じている」というクリスチャンの一致の感覚。祈りにおいて、主イエスが語った福音において、異国の地で礼拝を共にしている喜びにおいて、ちゃんとつながっているという一致の感覚。やはり、礼拝は、尊いものです。その礼拝を、全世界の人々が、心を合わせて神に献げていますし、「我らの主イエスよ」と祈って礼拝につながっています。ケルンとブリュッセル。それぞれの教会で礼拝を守りながら感じた、「今、心が通じている」という、あのとときめく気持ちは、格別な思いでした。

六. やさしい

たとえ地上で遠く離れても、神からの距離は、どこでも同じです。地上に生きるすべての人が、神の温かな愛に包まれて生きています。そう信じていても、やはり、海外に生きる日本人クリスチャンは、孤独や

疎外感を感じずにはいられません。そのような方々のために、神の愛を目に見える具体的な形に表していくのも、日本基督教団の大切な職務のひとつです。そのために、「私にできることがあるならば、それを担っていきたい」と強く感じたヨーロッパ研修の旅でした。

ニーマン和歌子さんのこと

シュミット亜弥子

一月二日に脳卒中で入院し、七日朝に和歌子さんは天に召されました。私は六日に休暇から帰り電話で入院を知り、知人に知らせの電話をしている内に七日亡くなった知らせを受けました。とてもショックでした。彼女は去年七〇歳になったところでした。

彼女とは我が家で行なわれる月一回のケルン家庭集會と、月一回の食事で顔を合わせていました。和歌子さんは四〇年前位に日本で結婚しニーマン氏と息子さんとケルンに住み始めました。日本人のお友達を求める記事を出し、Wさんとコンタクトを取った話を聞いています。二五日の葬儀の時に聞いた話ですが、一九八〇年代中頃KB教会のDさんにニーマン氏から電話があり、それからケルン・ボン教会に和歌子さんが来られるようになったそうです。

彼女は佐々木悟史牧師から洗礼を受けCSの奉仕をして下さっていました。しばらくたってから和歌子さんはニーマン氏の所属するドイツ自由福音教会の会員になり、家族皆で教会に行くようになりました。その自由福音教会は最初ボンに出来た私達の教会がケルンに移った時に午後の礼拝に使わせて頂いた教会です。ボンに始まった教会なので私達の教会はケルン・ボンと名付けています。当時会堂を使わせて頂いていた自由福音教会で和歌子さんは日本人の佐々木悟史牧師から洗礼を受け、その同じ教会でドイツの牧師の司式により葬儀が行われました。三年前にニーマン氏が亡くなったいてメラテン墓地にお墓があるので、和歌子さんもそこに埋葬されました。

和歌子さんは「明るい人」です。タバコが好きで吸

う人と一緒に集会后は庭に出て一服していました。植物の好きな人で私の小さなテラスでもタバコをくわえながら、きれいに掃いてくれたのを懐かしく思います。日本人仲間であまり言う人は居ませんでした。ドイツ教会のなかではワットンと言って親しまれていて、葬儀司式の中でも和歌子さんではなくワットンと牧師は言っていました。

ドイツではよく花代の代わりに何処かに寄付をする様にカードなどに書いてあります。和歌子さんの場合も息さんが考えたのか、子供ホスピスに寄付を託記してありました。

和歌子さんはニーマン氏と一回り以上歳が離れていて、彼がアルツハイマーになり自宅で和歌子さんが介護をし、その後で老人ホームに移りました。それでも毎日の様に訪問をしていて介護士さん達から感心されていると言っていました。

和歌子さんの事もあって、最近ケルン家庭集會でも死について話すことが多くなりエンディングノートについても考える機会になりました。

賛美歌の球根の歌の歌詞に「その日その時をただ神が知る。」とありますが、本当にそう思います。

和歌子さんは先に逝かれましたが、私もいつかは続く者です。

遺された家族に平安がありますように。



◇ 報 告 ◇

一月一五日の礼拝は、日本基督教団派遣宣教師としてアメリカ・バイン合同教会に遣わされる川合望先生をお招きしました。昨春よりビザを申請していましたが、一年間自宅待機となっていました。この機会に海外の教会を学ぶために私たちの教会の他、プラハ・コピリシ教会、ベルギー・ブリュッセル教会などでご奉仕されました。先生のこれからの働きのためにどうぞお祈りください。

二月一二日に二〇一七年定期総会が行われました。議案はすべて承認され、役員は引き続き尾畑秀治兄、藤井隼人兄、シユミット亜弥子姉が再選されました。本年もどうぞよろしくお祈りいたします。

新しく「ママの子育て学び会」が二月二〇日よりスタートしました。九名の方々がおいでになり、よい時を持つことができました。一ヶ月に一度牧師宅で行いますので、メンバーの方々が教会に繋がっていきますようにお祈りお願いいたします。

◇ 予 告 ◇

佐々木良子牧師は宣教報告のために二月二七日(三月二九日まで)日本へ一時帰国いたします。主日礼拝での説教・祈祷会などを中心に報告会がもたれます。欧州での宣教の働きとケルン・ボン日本語キリスト教会のことを多くの方々にご知って頂きますようにお祈りください。

尚、留守中の説教は左記の先生方が担って下さります。三月中の各集会は休会となります。ご了承下さい。
三月 五日(日) 説教 増谷啓伝道師
(オランダ南部日本語キリスト教会)

三月二日(日) 説教・聖餐式 浅野康 牧師

(シユットガルト日本語教会)

一九日(日) 説教 シュテクレ・コニー宣教師

二六日(日) 説教 矢吹博 牧師

(フランクフルト日本語福音キリスト教会)

※この日から夏時間に移行します。

【四月の主な礼拝・集会予定】

四月二日(日) 「聖書の食事」

D・ボンフェッファール教会との合同礼拝

四日(火) 聖書を学ぶ会 一〇時 牧師館

六日(木) ケルン集会 シユミット姉宅 一一時

九日(日) 子どもの礼拝 一二時三〇分

棕櫚の主日礼拝 一四時

四日(金) メアブツシユ家庭集会 一五時

一六日(日) イースター日独語礼拝・祝会 外間久美子姉宅

一八日(火) 聖書を学ぶ会 一〇時 牧師館

二三日(日) 賛美礼拝 一四時

三〇日(日) 主日礼拝 一四時

子どもの礼拝 四月九日 一二時半

今年から月に一度、原則第二日曜日の一二時半より「子どもの礼拝」を行っています。次回は四月九日です。

《イースター日独語礼拝のご案内》



四月一六日(日) 一四時より「日独語礼拝」として行います。礼拝後は「イースター玉子探し」後、祝会のひとときを持ちます。イエス様の復活をお祝いする主日の礼拝にご出席くださいますようご案内いたします。

《佐々木牧師の宣教報告の日程》

3月1日	日本基督教団 清水ヶ丘教会祈祷会/報告会
3月2日	日本基督教団 東京新生教会聖書研究/祈祷会/報告会 日本基督教団 東京聖書学校吉川教会祈祷会/報告会
3月3日	日本基督教団 世界直教部訪問/報告
3月5日	日本基督教団 井草教会礼拝説教/報告会 日本基督教団 小松川教会夕礼拝説教
3月6日	日本基督教団 東京教区 東支区教師委員会報告会
3月7~8日	日本基督教団 京都復興教会祈祷会/報告会
3月9~10日	日本基督教団 喬木教会祈祷会/報告会
3月12日	日本基督教団 小松川教会礼拝説教/報告会
3月19日	日本基督教団 志木教会礼拝説教/報告会
3月21日	国際キリスト教団 代々木教会報告会
3月22日	日本基督教団 柏教会祈祷会/報告会
3月26日	日本基督教団 洗足教会礼拝/報告会
3月27日	日本基督教団 鹿島栄光教会訪問/報告
3月28日	日本基督教団 仙台青葉荘教会訪問/報告

発行:ケルン・ボン日本語キリスト教会役員会
Japanische Evangelische Gemeinde
Köln-Bonn e.V.

〈主日公同礼拝〉

会場: Dietrich-Bonhoeffer-Kirche
住所: An der Decksteiner Mühle 1
50935 Köln (Lindenthal), Germany
電話: 0221-4300319 (礼拝前後のみ)
時刻: 毎週日曜日 14:00-15:00

〈牧師〉 佐々木良子 (Pfr. Ryoko SASAKI)

牧師館: Breslauer Str. 26, 50858 Köln
固定電話: 02234-9298792
携帯電話: 0151-2910 6278
Email: r310130s@yahoo.co.jp

〈ホームページ〉

http://koelnbonn.jp

〈振込口座〉

IBAN: DE97 3601 0043 0587 6034 38
BIC: PBNKDEFF